

弥生の絵画

Incised Drawings on Pottery in Yayoi Period

～唐古・鍵遺跡と清水風遺跡の土器絵画～

Karako-kagi

Shimizukaze



1. マツリの場に供えられた絵画土器

弥生時代には、土器に建物や人物など様々な絵が「ヘラ」で描かれた。絵画が描かれる土器の多くは壺で、おそらく、お酒が入れられていたのでしょうか。このような土器はマツリの場に供えられる特別な土器だったと考えられます。



1.矢が刺さった壺

矢は底の背から刺されています。
矢の文を充実した体
内に描いています。木の葉状の縁まで装飾されています。

2.魚と壺?

左側の魚には、垂涙するように下歯の魚が消されずに残っています。
また、魚の下側には骨状の表面をもつ壺?が描かれています。



3.盾と戈をもつ鳥装のシャーマン

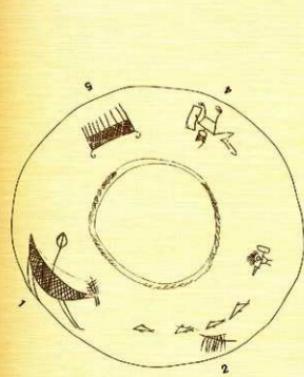
右手に戈、左手には盾をもち、
けた人が描かれています。

4.盾と戈をもつ鳥装のシャーマン

左側人物と向かいに盾と戈を持つ人物ですが、盾の被り物は矢
羽状で、右向きに大きく描かれています。

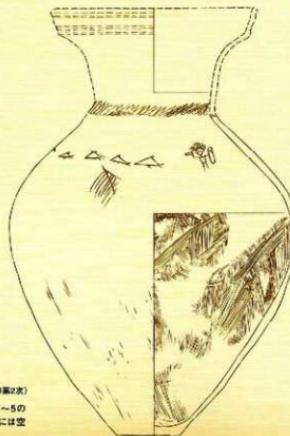
5.大型建物

切妻屋根で渦巻き状の構造をもつ、柱間9間の大規模
建物でしょう。



6.全体の構図がわかる絵画土器壺(清水町遺跡2号)

「酒壺」と考えられる複合的構成に並列的に1~5の
絵画が描かれています。1~3と4~5の絵画の間に空
白があり、2つの構成が考えられます。



7.再現された盾と戈をもつ鳥装のシャーマン模型
(奈良・橿原古墳ミュージアム)

絵画土器や各地の遺跡出土品を参考に復元。



8.銅鐸形土製品に描かれた
武器をもつ人物(古代・銅鐸跡第4段)
銅鐸を模したミニチュアの土製品の握身
に武器をもつ人物が斜めに描かれています。



9.銅戈を描いた壺(奈良・銅鐸跡第5段)

壺の部分に頭部文を描くもので「大規模羽装銅戈」を写実的に表現しています。戈を単独に描いているもので、おそらく盾と
戈をもつ人物を象徴化させたものでしょう。

2. マツリの内容を読み解く鍵は?

絵画は、単独で描かれるこどもありますが、複数の画面で構成されるものもあります。大半の絵画土器は、割れて出土しているため全体がわかるものは少ないのでですが、唐古・雞遺跡や清水風遺跡では複数の絵画で構成された良好なものがあり、マツリの内容を読み解く鍵になっています。

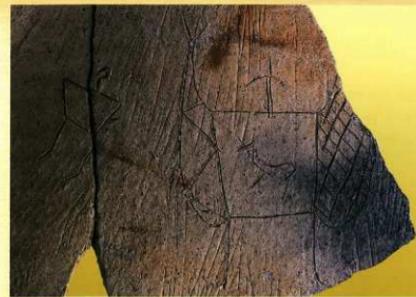


10.並列的な構図をもつ大壺
(唐古・雞遺跡第2次発)

大壺の腹部に抽象・幾何・人物・動物を描いた、ほぼ全てがわかる複数点の例です。
右側人物の上半身部は欠失していますが、
清水風遺跡例(1)から両手を擧げる女性
シーマンと推定できます。



3 両手を擧げるシーマン・壺物



11.両手を擧げる鳥装のシーマン(清水風遺跡第1次/奈良県立橿原考古学研究所)



12.再現された両手を擧げる
鳥装のシーマン模型
(唐古・雞遺跡第2次/ジルム)



13.両手を擧げる人物
(唐古・雞遺跡第2次/天理大学附属天理参考館)



14.両手を擧げる人物
(唐古・雞遺跡第2次/天理大学附属天理参考館)



15.両手を擧げる人物
(唐古・雞遺跡第2次)



16.建物と人物(清水風遺跡第2次)



17.高床建物に昇る2人の人物(唐古・雞遺跡第1次/京都大学総合博物館)

3. 唐古・鍵遺跡の絵画土器点数は全国一

弥生時代の絵画土器は、全国で600点以上出土していると思われますが、中でも唐古・鍵遺跡では350点以上、清水風遺跡では50点ほどの絵画土器が出土しています。この2つの遺跡から出土した絵画土器は、全国の弥生遺跡のなかで突出しています。2000年前の唐古・鍵や清水風のムラでは、盛んにマツリがおこなわれていたのでしょうか。

18.鳥がとまる櫛間(清水風遺跡第2次)
椎間に鳥が描かれており、櫛が小さいことから櫛間と推定されます。また、この櫛間から唐古・鍵遺跡の櫛間(19)の下部屋根の3つの中間・鍵の香椎と推定されます。



19.櫛間と大型建物(唐古・鍵遺跡第47-77次)

唐古・鍵遺跡のシンボル的存在を示す絵画土器です。3片の土器片が見つかっており、櫛間と密接につながる大型建物が描かれています。

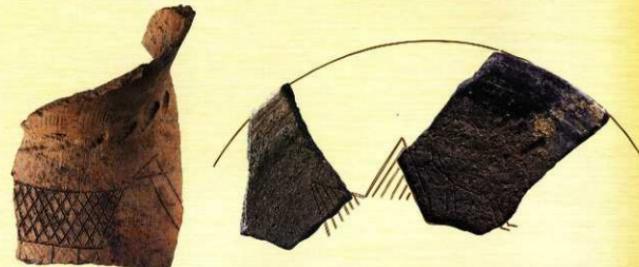


22.切妻の高床建物
(唐古・鍵遺跡第59次)

23.切妻の高床建物
(唐古・鍵遺跡第53次)

24.寄棟の高床建物(唐古・鍵遺跡第33次)

25.寄棟の高床建物(唐古・鍵遺跡第70次)



26.切妻の高床建物と櫛
(唐古・鍵遺跡第73次)

27.縦曲文と櫛(唐古・鍵遺跡第63次)

壁面の内面に描かれたもので、本來は見えない絵画です。26のように建物と櫛は並列的に描くパターンが多くあることから、ここに描かれた箇所は建物が書き換わったものと考えられます。



28.櫛と縦曲文(唐古・鍵遺跡第62次)

建物と2段の縦曲文が描かれており、この縦曲文も建物が書き換されたと考えられます。

4. 描かれた画題は弥生人が信仰していたもの

絵画土器の画題には、建物・船・人物・鹿・島・スッポン・魚・カエルなどがあります。これらは弥生時代にあったものや動物が対象となっていますが、当時あったものすべてが描かれているのではなく、信仰の対象となっているものだけが描かれたようです。これらの画題は、日本各地の弥生遺跡から出土する絵画土器と共通しており、植作とともに伝わった農耕儀礼の存在がうかがえます。



29.鹿と魚(古・経遺跡第89次)

2頭の鹿の間に上向きの魚が
大きめ描かれています。



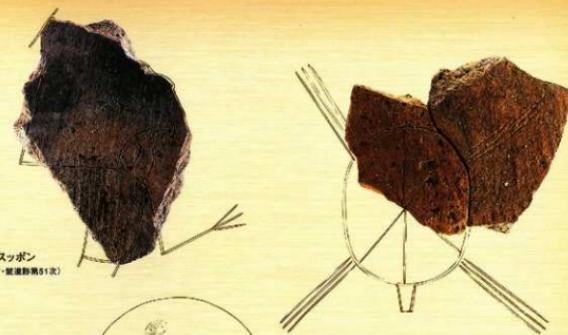
30.魚(古・經遺跡第3次)



32.魚(古・経遺跡第50次)

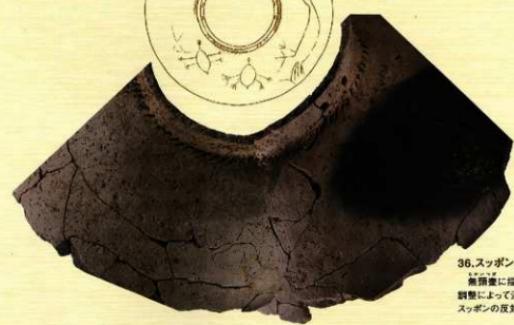
魚を上から見ていたと推定され、
輪郭と黒絵の表現が特徴的です。

37.島と桟橋
(古・経遺跡第69次)



34.スッポン
(古・經遺跡第51次)

35.スッポン
(古・經遺跡第80次)



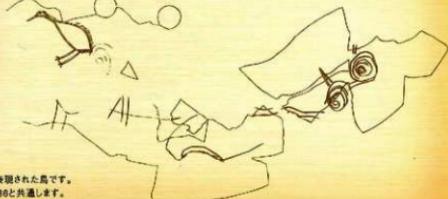
36.スッポン・鳥・渦巻き(古・經遺跡第91次)

絵画土器に描かれたスッポンや鳥ですが、ミガキ調整によって渦巻きがんど見えなくなっています。
スッポンの反対側には渦巻き模様があります。



38.鳥・渦巻き・不明(古・経遺跡第91次)

くらはしや鳥、背中の鳥、脚先まで写実的に表現された鳥です。
この器皿には、他にも渦巻きが表現されており、38と共通します。



5. 共通する唐古・鍵と清水風遺跡の絵画

唐古・鍵遺跡の分村と考えられる清水風遺跡は、唐古・鍵遺跡の北北西600mに位置します。この遺跡の発掘調査では、河跡から多量の絵画土器が出土しました。一方、この上流にある唐古・鍵遺跡でも「北方砂層」(河跡)があり、多くの絵画土器が出土しています。この2つの遺跡の絵画土器は、描かれた土器の形、鹿の頭部や角、建物の渦巻きなどの表現方法が共通しており、密接な関係が想定されます。



唐古・鍵と清水風遺跡の関係



39. 船を漕ぐ人・種・鳥 (唐古・鍵遺跡第1次／京都大学総合博物館)

船を漕ぐ人物画として有名な絵画土器です。船の針路方向には種と向かい合う2羽の鳥がいます。



40. 船と切妻建物
(清水風遺跡第1次／奈良縣立橿原考古学研究所)

6. 絵画土器がたくさん作られたのは二千年前

弥生土器の絵画は、弥生時代前半頃から出現しますが、大半は中期後半(約二千年前)のものです。この時期の絵画は、シンプルな線刻で対象となった建物や動物の特徴を的確に表現しており、線刻画としては完成されたものでしょう。



41. 脱れをなす鹿
(考古・縫縫跡第50次)
鹿古・縫縫跡の表面の中では、最も古いものです。



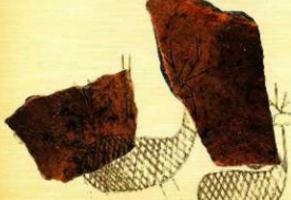
42. 脱れをなす鹿
(考古・縫縫跡第1次／東京大学総合博物館)



43. 脚先表現のある鹿
(考古・縫縫跡第43次)
脚先が二段に分かれた表現は、筑前頭の鹿をよく経験しています。

44. 矢負いの鹿
(考古・縫縫跡第63次)

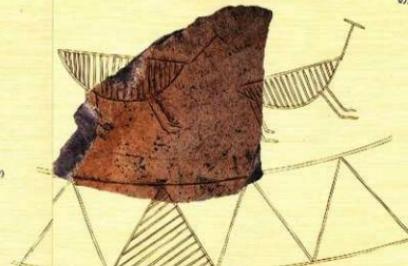
鹿のお尻に矢が刺さり裏に向いている鹿が描かれています。



46. 鹿
(考古・縫縫跡第81次)
鹿古・縫縫跡で描かれる鹿の表現としては最もモチーフとして多く見られるものです。



48. 種類的な表現の鹿
(考古・縫縫跡第76次)
絵画の実現力は、弥生時代後期になると進化し、46～51の鹿にみるように角の表現からかろうじてわかる程度です。



47. 器台に描かれた鹿
(考古・縫縫跡第23次)

半円形の器底をもつ鹿は、鹿古・縫縫跡では数少ない鹿の表現です。46のような鹿表現より古い表現と考えられます。



49. 器台に描かれた鹿
(考古・縫縫跡第47次)



50. 逆さの鹿
(考古・縫縫跡第61次)



51. 長頭鹿に描かれた鹿
(考古・縫縫跡第1次／奈良県立橿原考古学研究所)

左側の鹿のお尻には、小さな四角形の表現があり、尻尾を表現しているようです。2頭の鹿の後ろには横線が2本描かれ、這うようとしている鹿に矢が突き出でています。

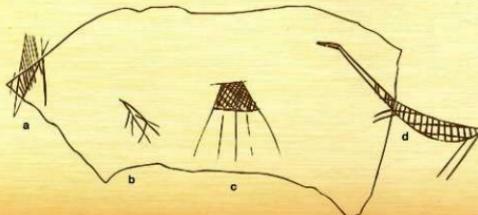
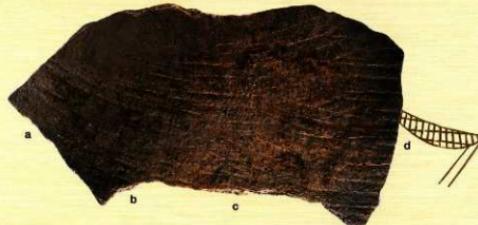
鹿の前面には抽象化が進み、記号面に近づいています。

7. 下絵・描き直し・後刻・消された絵画

絵画土器のなかには、下絵のあるものや下絵と全く別の絵が描かれたもの、絵画の線刻が大変細く第三者には見えづらいもの、また、土器製作途中に描かれ、絵画の一部が消えてしまったもの、焼成後に描かれたもの（後刻）があります。どのように絵画を描く行為はたいへん複雑です。絵画を通して弥生時代の人のメッセージを受け取ることは、簡単ではありません。

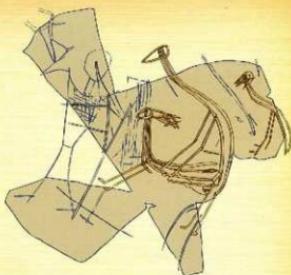


52. 下絵がある盾と戈をもつ人物(考古・復元跡第1次／京都大学総合博物館)



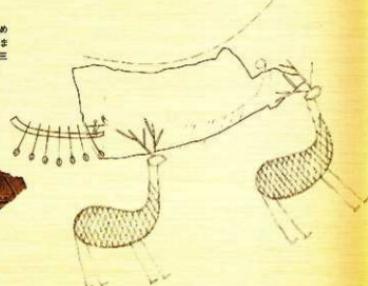
53. 見えない絵画(清水戸遺跡第2次)

非常に細い工具で描かれた絵画で、ほとんど見えません。盾(b)や槍物(c)、盾(d)が描かれています。



54. 描き直された絵画(考古・復元跡第3次)

盾と羽の鳥が異なるように描かれています。この盾の左側には、はじめ盾と戈をもつ人物やその他の絵画が描かれていたようですが消されています。ただし、丁寧には消さず、また違う絵を描いていることから、絵画を第三者に見ようとしているのではなく、描くことが需要だったことがわかります。



55. 描き直された絵画(考古・復元跡第3次)

盾の角部分が深く長い縦刻として残っていますが、その両側には槍物に立ち右手を広げた人物(a)と槍物(b)の絵画が細くわずかに残っています。



56. 土器焼成後に描かれた魚(考古・復元跡第2次)

大半の絵画は、土器作りの途中や最終段階に描いていますが、焼成後に石器のような工具で刻んでいるものもあります。

57. 土器焼成後に描かれた魚(考古・復元跡第4次)

裏側面中央に上向きの魚が刻まれています。

8. 絵画から記号・文様へ

弥生時代後期になると、絵画の表現法は雅拙・退化し、何を描いているのかわからないものが多くなります。また、その一方で絵画の一部が象徴化され、記号や特殊な文様に変化するものがみられます。弥生時代後期には、絵画土器の役割は、記号土器や特殊な土器へと変化していったのでしょうか。



58. 龍(唐古・鏡道跡第19次)



59. 龍から変形した記号(唐古・鏡道跡第33次)



60. 龍から変形した文様(唐古・鏡道跡第14次)



61. 龍から変形した文様(唐古・鏡道跡第91次)

○協力機関(原品所蔵者)

京都大学総合博物館(17-39-42-52)
奈良県立橿原考古学研究所(11-40-45)
天理大学附属天理参考館(13-14)

○写真撮影

亀村俊二・佐藤右文

●上記機関所蔵品以外は、田原本町教育委員会所蔵



62. 文様となった龍(唐古・鏡道跡第74次)

田原本の遺跡4 弥生の絵画 ～唐古・鏡道跡と清水風遺跡の土器絵画～